様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　５月　２７日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010 ～ 2012
課題番号：22520337
研究課題名（和文）　モダニズム／エグゾティシズム研究――文学・芸術における異化作用

研究課題名（英文）　Study of Modernism and Exoticism：the influence of dissimilation in literature and arts

研究代表者
谷　昌親　（TANI　MASACHIKA）
早稲田大学・法学学術院・教授
研究者番号：90197517

研究成果の概要（和文）：
ロジェ・ジルベール＝ルコントとアンドレ・ブルトンは、合理主義に支えられた西洋の近代文明に対して異化作用をもたらす〈他者〉の働きに敏感であったが、この２人の詩人＝思想家についての研究を主におこない、前者については、日本では初めてとなる著作を上梓してその全貌を明らかにしようと試み、後者については、特にマルチニック、ハイチ、そしてアメリカのインディアンから受けた影響についての論文を継続的に発表した。
その他、ミシェル・レリスとレーモン・ルーセルについては、その著作の翻訳に取り組みつつ、それぞれの作品に見られる独特の異化作用のメカニズムの解明についての研究を進めた。また視覚芸術、とりわけ映画や写真といったメディア特有の異化作用にも注目し、一方、以上の研究の理論的基盤を作るべく、精神分析や文化人類学の観点からも異化作用について考察した。

研究成果の概要（英文）：
Our research was focused on Roger Gilbert-Lecomte and André Breton who were very sensitive to the action of “others” on the Occidental modern civilization. It resulted, about the former, a first book written in Japanese which reveals all the details concerning him, and about the later, a series of treatises on the influences he received from Martinique, Haiti and American Indians.
On the other hand, we also studied Michel Leiris and Raymond Roussel from the point view of the effects of dissociation as we were translating their works in Japanese. We also paid an attention to the dissociation produced by the visual arts, especially cinema and photography. At last, we didn’t forget to pursue our studies in psychoanalysis and cultural anthropology in order to prepare the theoretical base for all above researches.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	600,000	180,000	780,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
２０１２年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学
キーワード：仏文学・仏語圏文学

１．研究開始当初の背景

本研究は、20 世紀初頭の西欧における文学・芸術上のモダニズムを主な対象とし、その本質をエグゾティシズムとの関係から解明しようとするものである。転換期に生じたモダニズムは、21 世紀に入った現在、資料を新しい視点から検討する必要があり、文学・芸術のこれからの可能性を探るうえで解明が不可欠であると考える。

今回は、拙論「植民地博覧会に降る雨――一九三一年のシュルレアリスム」（科研費研究成果報告書所収、平成 19 年）以降のシュルレアリストとポスト・コロニアリズムの問題を扱った一連の論文、拙著『詩人とボクサー――アルチュール・クラヴァン伝』（青土社、平成 14 年）のテーマを継承し、発展させる試みとして、とくに「異化作用」に注目して研究を進めたいと考えた。そのためには、精神分析学や文化人類学の思考法を取り入れるとともに、「異化効果」の演劇理論で知られるブレヒトに影響を与えたとされるシクロフスキーに遡る必要もある。日常に見慣れぬことがらをその関連から解き放ち、ずれを与え、奇異なものにする「異化」の作用がエグゾティシズムを成立させるさまを読み解くことによって、モダニズムの本質をとらえ、20 世紀に登場してきたさまざまな前衛的文学・芸術運動を再検討するものである。

２．研究の目的

「人間は波打ちぎわの砂のように消滅するだろう」と書いたのはミシェル・フーコーだが、そうした「消滅」の予兆はすでに 19 世紀末に始まり、20 世紀はじめに大きなうねりを生じさせた。西洋近代合理主義が誕生させた「人間」の崩壊をさまざまな芸術運動のうちに見ていこうとするのが本研究の目的である。したがって、ダダやシュルレアリスムなどの前衛芸術運動が前面に出てくるが、同時に、人間の知覚の限界を知らしめる結果になった写真・映画などの新しい芸術ジャンルにも注目した。

(1)<u>何をどこまで明らかにしようとしたのか</u>

さまざまな「異化」の背景にはエグゾティシズムの二つの形態が挙げられる。一つはアフリカ、オセアニア、アジアなどの植民地文化の導入による西洋文明の見直しという字義通りのエグゾティシズムであり、もう一つは、フロイトによって提唱された精神分析学が無意識の領域に光を当てたことで、人間の精神活動が新たな視点から見直され、西洋近代的な自我に未知の要素がもたらされたという事態を指す。後者は、人間の精神世界に関係するものであるが、西洋合理主義の「外部」が問題になるという意味では、広義のエグゾティシズムと考えられるのである。

この「異化」の二つのかたちに鑑み、1910 年代から 20 年代にかけての時期に登場してきたダダやシュルレアリスム、またそれらを核として周辺に湧き起こったさまざまな動きから、モダニズムと異化作用の問題を浮き彫りにしようとした。また、人間の知覚作用や世界観に新たな視点をもたらした写真と映画の表現形態も、そうした新しい視点の導入を異化作用と見なすならば、エグゾティシズムの観点からとらえなおすことができるだろう。

以上を全体的な基盤とした上で、具体的には次の５つの柱に分けて研究をおこなった。

a) レーモン・ルーセル研究――レーモン・ルーセル(1877-1933)はダダ・シュルレアリスムの先駆者と見なされているが、本人はこうした前衛芸術運動には興味がなく、世界各地を旅行したほかは、ただひたすら自分の殻に閉じこもって創作に没頭するうちに、前衛芸術家たちから称賛される作品を生み出した。芸術運動とは無縁な個人が、神経症に苦しみつつ、いかにして時代の気運に沿う新しさを導き出したのかを調べることで、モダニズムの一端が見えてこよう。

b) ミシェル・レリス研究――ミシェル・レリス(1901-1990)は、1920 年代、シュルレアリストとして活動したのち、1931-33 年のダカール・ジプチ調査団に参加して民族学者となり、その一方で、精神分析の治療も受けつつ、自伝的エッセの執筆に没頭した。その彼にとって、モダニズムの問題がつねに活動の根幹にあり、これを独特のリアリズム観と関連づけることで、自己の問い問い直しを図っていた。レリスは、「創造的リアリズム」といった言い方もしており、まさにありのままの現実に異化作用を加えて生じるものが問題になっていたと考えられるのである。

c) ダダ・シュルレアリスム研究――フランスのダダ・シュルレアリスム運動を語る場合に、ツァラ、ピカビア、ブルトンといった存在が中心になるのは当然だが、先駆的な存在とも言えるジャック・ヴァシェやジャック・リゴー、あるいは独特の霊媒的な素質でブルトンを驚かせたロベール・デスノス、さらに、運動の周辺的位置にいたグループ、たとえばマッソンのアトリエに集まっていたグループ、「大いなる賭け」のグループ、バタイユが中心となった『ドキュマン』誌や『アセフ

ァル』誌のグループなどとの関係から見ていくことも重要であろう。とりわけ、「大いなる賭け」のグループは、神秘主義の影響もあり、西洋合理主義に立脚する主体概念を徹底的に否定したという事実は注目に値する。また、上記のレリスも参加していたバタイユのグループにおいては、ブルトンたちのグループ同様に精神分析の影響が認められる一方で、民族学的方法への関心が高く、異文化をとおして自己の相対化がおこなわれた点は重要である。

また、文学のみにとどまらず、絵画・彫刻・写真・映画に深くかかわったダダ・シュルレアリスムは、人間の知覚に対する新しい視点をもたらして近代的な自我を問い直し、いわば「主体の解体」を試みたわけで、まさに主体概念に対して異化作用が働いたことになる。そして、ここから、ポスト・モダニズムに至る道筋も見えてこよう。

d) 視覚芸術と無意識/身体性――写真や映画のように、カメラというひとつの機械をとおして現実をとらえる新しい芸術の出現によって、世界に対する人間の関わり方までが変化した。あらゆる被写体を同じ資格でとらえるカメラは、肉眼で見るのとは異なった風景をもたらしたのである。人間の意識からそれまで逃れていた細部が写真や映画には定着されるのであり、ベンヤミンの言葉を待つまでもなく、「視覚における無意識的なものは、カメラによってはじめて私たちに知られる」のである。ダダイストやシュルレアリストたちが写真や映画に興味を持ったのも、まさにそのためであった。写真や映画によって、人間の知覚には変化が起こり、身体感覚までもそれまでとは異なるものになってきている。

そうした観点から見るなら、モダニズムと深くかかわりのある写真や映画といった表現形式が、人間に対して異化作用を及ぼしたことがわかってくるはずである。また、戦後、1960 年代あたりになると、1920 年代の前衛運動を継承しつつ、従来の身体感覚を問い直す芸術活動が盛んになる。それは、無意識の働きを積極的に導入した身体から生み出される作品の追及であったと言えよう。そのとき、自己の身体そのものもわれわれにとって一種の異物として現れてくる。したがって、20 世紀の視覚芸術における異化作用を無意識や身体性との関係で見直す視点が求められるのである。

e) 20 世紀文化・社会・思想研究――モダニズム、そしてそのモダニズムに深くかかわる異化作用が、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけての西欧の社会的・文化的文脈から生まれてきたことを考えるなら、そうした文脈の検討をすることなしにこれらの問題を論じることはありえない。また、すぐれた文学・芸術運動には必ず思想的裏付けがあり、思想もまた文学・芸術運動から刺激を受ける以上、この時代の思想を研究することも必要になる。しかも、モダニズムの本質をなすエグゾティシズムは、西洋 - 東洋、文明 - 未開といった二項対立を乗り越え、新しい文化のあり方を内包していたと言えるのだが、これはすでにモダンを越え、ポストモダンにかかわるものである。たとえば、ジャック・デリダの「脱構築」やジル・ドゥルーズの「リゾーム」といった概念も、ある意味では、広義のエグゾティシズムを生み出す異化作用に比することができよう。したがって、こうした視点からの研究は、モダニズムをポスト・モダニズムの視点から検証しなおすことにもつながるだろう。

(2) 研究の特色と意義

従来の文学研究は、細部にこだわるあまり、それぞれの作家がおかれた社会的・文化的・思想的文脈をなおざりにするきらいが見受けられた。本研究では、「モダニズム／エグゾティシズム」という巨視的な観点から眺めることで個々の作家や文学・芸術運動に新たな光を当てるとともに、逆に個々の事例から「モダニズム／エグゾティシズム」への逆照射をおこない、西欧社会において重要な役割を演じたこの現象を解明しようとするものである。さらに、「モダニズム／エグゾティシズム」という観点を導入することで、文学のみにかぎらず、広く学際的な研究が可能となるのも本研究の特色および意義であろう。

３．研究の方法

すでに述べたように、本研究は次の 5 つの柱からなる。

a) レーモン・ルーセル研究
b) ミシェル・レリス研究
c) ダダ・シュルレアリスム研究
d) 視覚芸術と無意識/身体性
e) 20 世紀文化・社会・思想研究

これらの研究を同時並行的におこなってきたわけで、年度ごとに核になる研究を設定し、順次取り組んできた。ただし、どの年度においても主となるのは a)から c)で、d)はそれらをさらに視覚芸術の分野に広げたり、やや異なる視点から考察したりすることを可能にしてくれるもので、e)はそれらすべての基盤を成すものである。

この 3 年間について言うと、c)の分野の研究が先行するかたちとなり、「大いなる賭け」グループについての研究や、シュルレアリスムとポスト・コロニアリズムの関係の研究を中心的におこなう一方、ルーセルやレリスについて、その作品の翻訳を進めつつ、作品の重層性の問題などを調べた。さらに、それと並行して、映画や写真、そして絵画におけるモダニズム的な表現について考察し、文学に

おけるモダニズムとの関係を探った。また、「異化」の概念や精神分析学の理論の応用についても研究した。

４．研究成果

以下、2010 年度（平成 22 年度）～2013 年度（平成 24 年度）の研究成果を項目ごとに記す。なお、研究の５つの柱 a)～e)との関係で言えば、(1)と(2)は c)、(3)が b)、(4)が a)、(5)が d)、そして(6)が e)に対応することになる。

(1) 〈大いなる賭け〉とロジェ・ジルベール＝ルコント研究

まずは、〈大いなる賭け〉グループの詩人ロジェ・ジルベール＝ルコントについての著作の完成に力を入れた。ジルベール＝ルコントは神秘思想や東洋思想の影響を受け、合理的な思考からすれば虚無としか見えない「誕生以前の世界」を求めた。それは「詩＝形而上学」の探究でもあり、また、個人が孤立せずに水面下につながりあった一種の〈全体〉の希求でもあった。こうしたジルベール＝ルコントの思想や詩はまさに本研究のテーマとなっている異化作用の典型と言えるものである。

なお、ロジェ・ジルベール＝ルコントについての著作は世界的に見ても稀であり、日本語で書かれた著作はこれが初めてである。

(2) アンドレ・ブルトンとポスト・コロニアリズム研究

アンドレ・ブルトンは早い時期からいわゆるプリミティヴ・アートに惹かれていたが、彼が、短期間の旅行は別にして、実際に西洋以外の文明と真に触れ合うようになるのは、第 2 次世界大戦中のことであり、この時期のブルトンの思想や作品についてのポスト・コロニアリズム的な文脈からの検討は、ブルトン研究のなかでもまだどちらかといえば進んでいない分野である。われわれは、そうした状況も考慮に入れ、ブルトンと〈野性の思考〉の出会いをマルチニック、アメリカ・インディアン、ハイチの場合について以下のようにそれぞれ論文にまとめた。

①〈大いなる賭け〉に先行するシュルレアリスムの中心的人物アンドレ･ブルトンも、夢や狂気、あるいは無意識に注目することで、文学・芸術における異化作用を追求した。そのブルトンが、第 2 次世界大戦中にマルチニックに立ち寄り、自分の求めていた異化作用が実現した世界と出会った興奮に酔う一方で、そのマルチニックが植民地としてヨーロッパから収奪の対象になっていることに義憤を抱いて書いたのが『蛇使いの女マルチニック』である。普段はあまり注目されないこのブルトンの著作を精読することで、彼の求めた異化作用を明らかにするとともに、モダニズムとエキゾティシズムの関係にも迫る試みとして論文を執筆した。

②シュルレアリスムをアンチ・コロニアリズムの文脈で見なおすという作業のなかで、上記①に続けて、アンドレ・ブルトンと非西洋的な思考や表現との出会いについて考察し、とりわけホピ・インディアンから彼が受けた影響について論文にまとめた。シュルレアリスムという一種の異化作用のなかで西洋以外の文化に惹かれてきたブルトンは、大戦中に渡ったアメリカでホピ・インディアンの土地を実際に訪れ、そこで新たな思想や表現の可能性を感じ取ったが、その点を、彼がやはり影響を受けたと思われる空想社会主義者シャルル・フーリエとの関係も考慮に入れ、論じたわけである。そこから明らかになってきたのが、異化作用によってもたらされる独特のアナロジーの方法である。つまり、異化作用は距離を作りだすことで、逆に、通常は結びつかないもののあいだに関係性を見出す働きにもなると考えられるのである。

③さらに引き続き、アンドレ・ブルトンとハイチの関係についても調べた。第 2 次世界大戦中にアメリカに渡ったブルトンは、1945 年末、招かれてハイチに赴き、連続講演をおこなった。それがいわゆるハイチ革命の引き金になったと言われているのだが、ブルトンのほうもハイチの自然やブードゥー教から大きな影響を受け、特にブードゥー教に関しては、その恍惚体験をシュルレアリスムにおける夢や無意識の重視と結びつけ、そうしたハイチの自然や民間信仰が、「人間が自分自身と和解すること」を可能にしてくれると確認したのだ。それはまた、「新しい神話」における「透明な巨人」につながる。ここには、疎外されていた本源的な自己に至る回路がエキゾティシズムによってもたらされるという一種の逆説が見てとれるのである。

(3) ミシェル・レリス研究

シュルレアリスムに参加したミシェル・レリスについては、その著作の翻訳に取り組みつつ、ジルベール＝ルコントやブルトンともやや異なり、日常性のなかにはらむ異化作用を求めるその文学活動の研究を進めている。

ちなみに、ブルトン同様、ミシェル・レリスもアナロジーの方法を活用して執筆活動を続けた作家といえる。彼は、日常生活のなかの何気ない出来事や事物に異化作用に基づいたアナロジーを適用しているのである。

現在翻訳中なのは、レリスの主著『ゲームの規則』の第 4 巻『かすかな響き』であり、翻訳作業を進めつつ、このきわめて重要な書物の分析もおこなった。五月革命後の時期に書かれた『かすかな響き』には、革命への一

種の憧憬が見てとれるが、レリスにとって革命は、それが自己の変革につながるという意味では、モダニズムやエキゾティシズムと通底していた。しかし、彼はそうした革命＝モダニズム＝エキゾティシズムを単純に信奉するのではなく、その限界や危険性にも意識的である。要するに、やみくもな異化作用はむしろ自己疎外をもたらし、「人間が自分自身と和解すること」には至らないのだ。

(4) レーモン・ルーセル研究

ミシェル・レリスに影響を与え、アンドレ・ブルトンによって高く評価された異端の作家レーモン・ルーセルについては、やはり著作の翻訳にも取り組みつつ、言語遊戯を利用したその独特の異化作用のメカニズムの解明をおこなっている。

また、レリスの場合にもある程度言えることだが、一種の言語遊戯がアナロジーを誘発する場合があり、それがルーセル独特の「手法」を可能したとも言える。そうした意味では、ルーセルからブルトン、そしてレリスへとつながる道筋を見ることもできよう。

(5)視覚芸術研究

シュルレアリスムにとっても重要であった視覚芸術の在り方についても、無意識や身体性との関係に注目しつつ、異化作用の観点から研究をおこなった。特に、異化作用やそれに伴うアナロジーの方法に適しているとも言える写真や映画については、一方では写真史や映画史に基づきつつ、精神分析の方法との関係も視野に入れることで、その特性を明らかにしつつあるし、それはまた、20 世紀の思想や文化を見なおす作業にもつながっている。

映画や視覚をめぐる問題を、シュルレアリスムとも関連づけつつ、モダニズムやエキゾティシズムの観点からとらえなおすことが、今後の課題でもあるだろう。

(6)20 世紀文化・社会・思想研究

上記の文学・芸術関係の研究の理論的基盤を作るべく、精神分析や文化人類学、またフォルマリズムの問題についての研究もおこなった。今後は、文化人類学、特にブルトンと面識もあったレヴィ＝ストロースの思想とシュルレアリスムの関係、シクロフスキーの〈異化〉の概念とシュルレアリスムの思想の関係などを調べることが必要になるだろう。

(7)今後の課題

最後に、簡単に今後の課題に触れておこう。上記の(6)でも述べたように、〈異化〉の思想的な背景をさらに明らかにしていく必要がまずはある。

また、ダダ・シュルレアリスム関係では、ロベール・デスノスについての研究が遅れているので、これを進めねばならない。一方、ルーセルやレリスについては、翻訳を完成させる一方、その過程でおこなった考察を論文にまとめる方向をめざす。

さらに、これまでシュルレアリスムとポスト・コロニアリズムの関係をおもに文学者の場合について調べてきたが、今後は、視覚芸術の領域についてもこの研究を発展させたい。また、〈異化〉の問題ではわれわれの関心をつねに引いている映画というメディアについて、まとまった考察をおこなうことも必要となるであろう。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①谷 昌親、「アンドレ・ブルトンと野生の思考（３）――ブードゥー教と「透明な巨人」」、『人文論集』、査読無、第 51 号、p. 69-88.

②谷 昌親、「アンドレ・ブルトンと野生の思考（２）――「ホピ・インディアンの地への旅の手帳」をめぐって」、『人文論集』、査読無、第 50 号、p. 1-22.

③谷 昌親、「アンドレ・ブルトンと野生の思考（１）――『蛇使いの女マルチニック』をめぐって」、人文論集、査読無、第 49 号、p. 17-38.

〔図書〕（計１件）

①谷 昌親、『ロジェ・ジルベール＝ルコント――虚無へ誘う風』、水声社、2010 年、356 頁。

６．研究組織

(1)研究代表者

谷 昌親（TANI MASACHIKA）

早稲田大学法学学術院教授

研究者番号：90197517